

Title	YB_6の超伝導とフォノン(VII. 格子系および電子-フォノン相互作用, 価数揺動状態の総合的研究, 科研費研究会報告)
Author(s)	國井, 暁; 門脇, 和男; 伊達, 宗行; Woods, S. B.; 糟谷, 忠雄
Citation	物性研究 (1984), 42(6): 82-83
Issue Date	1984-09-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/91418">http://hdl.handle.net/2433/91418</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

# YB<sub>6</sub>の超伝導とフォノン

東北大理、アルバータ大物理\*、阪大理\*\*  
 國井 暁、門脇和男\*、伊達宗行\*\*、S.B. Woods\*、糟谷忠雄

LaB<sub>6</sub>とYB<sub>6</sub>とは同じ結晶構造(cubic CaB<sub>6</sub> type)を持ち、格子定数も各々4.154Åと4.11Åとでそれ程変わらず、又長谷川ら<sup>1)</sup>によるLaB<sub>6</sub>のバンド計算と青木ら<sup>2)</sup>によるYB<sub>6</sub>のそれと比較すると殆ど同じ伝導帯を持ち、特筆すべき性格の変化はないといえる。

ところが、我々の作成になるYB<sub>6</sub>とLaB<sub>6</sub>との単結晶には大きな違いがあり、まずYB<sub>6</sub>の超伝導転移温度が7.5°Kであるのに対してLaB<sub>6</sub>では0.1°Kまで転移は観測されていない。又電気抵抗の測定ではYB<sub>6</sub>のほうが残留抵抗( $\rho_{im}$ )が大きいということだけでなく、 $\rho_{im}$ を差引いた残りの温度変化(図1)もLaB<sub>6</sub>とは低温部分が異っておりLaB<sub>6</sub>とは異った散乱機構が存在するかにみえる。磁化測定によれば、図2の如くYB<sub>6</sub>は典型的な第2種超伝導体の振舞を示している。

これらの相違は何に由来するものであろうか。まずphononの違う可能性がある。何故なら、LaB<sub>6</sub>とYB<sub>6</sub>とではB-B間の距離がoctahedronのintraとinterとではかなり異り、その差が3倍近くにも及ぶからである。<sup>3)</sup>つまりイオン半径の小さなYが入る事によってintra B-B間の距離は逆にかなりのびる。これはYの運動をかなり変えることになる。これらの様子はphononのstate densityがわかればかなりはつきりする。このためGaAs-Schottky barrierを用いたトンネル効果の実験を行った。

トンネル効果の実験は超伝導物質のT<sub>c</sub>とかenergy gapがわかるだけでなく、その物質中で起るelementary excitationに関する情報をいろいろおしえてくれる。しかしjunctionのsurface contaminationをいかに防ぐかは重大な問題で、このためもあって物質によって異りいろいろな実験方法が考えられてきた。ここでは、化合物に容易に便えて、機械的に安定で、酸化されにくく、chemical etchingが容易でclean surfaceが得られやすい等の理由でGaAs-Schottky barrier-point contact法

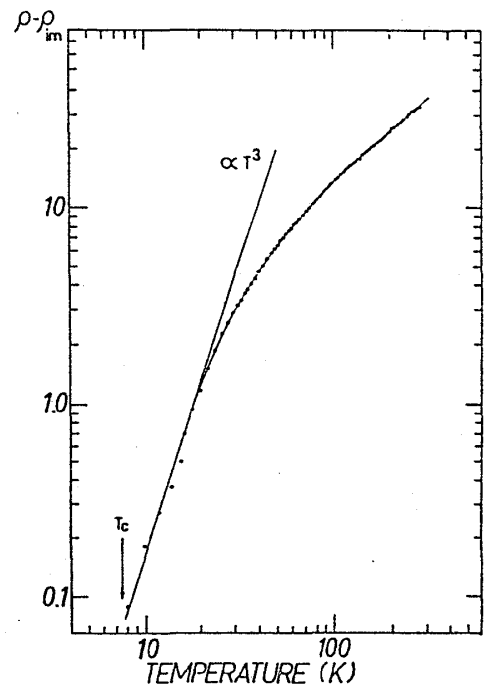


図1. YB<sub>6</sub>の残留抵抗を差引いた電気抵抗の温度変化( $\mu\Omega\text{-cm}$ )

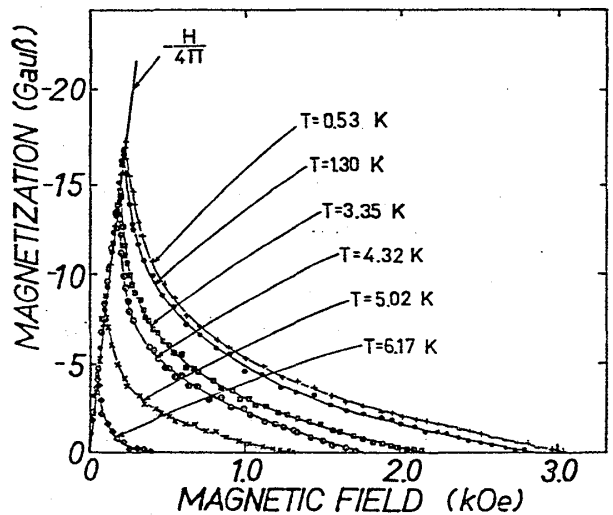


図2. YB<sub>6</sub>の各温度における磁化。

を使用した。GaAsはdegenerateしたものを選び、試料としてまず純金を使いGaAs特有のstructureがないことを確かめ、ついでPbを使い従来報告されている結果を得た。YB<sub>6</sub>のトンネルdataは試料と電極との間の放電cleaning<sup>4)</sup>を繰り返すことにより再現性のあるものが得られる様になった。すなわち、バイアス電圧の低い所ではconstantなconductanceであったものが、ちょうどenergy gapに相当するバイアス電圧で急激にconductanceが増大する。このconductanceの増大はgapをのりこえて電流が流れるということ、結局その遷移確率は超伝導体のstate densityに比例する。normal状態のconductanceでnormalizeしたconductanceを $\sigma(V)$ 、とすると、

$$\sigma(V) = \int_{-\infty}^{\infty} N_T(E) \frac{\partial}{\partial E} f(E+eV) dE \quad \text{----- (1)}$$

である。充分低温ではフェルミ分布函数(f)の微分は $\delta$ 函数であるから、実測の $\sigma$ がそのままstate density  $N_T(E)$ を与えることとなる。このstate densityはBCS theoryからenergy gapを $\Delta$ とすると、

$$N_T(E) = \text{Re} \left[ \frac{|E|}{(E^2 - \Delta^2)^{1/2}} \right], \quad \text{----- (2)}$$

と与えられる。実際 weak-coupling superconductor

(Sn, In, Al etc.)といわれるもののトンネルdataは(2)式でよくfitできる。ところが strong-coupling superconductor (Pb, Hg etc.) では(2)式からはずれてくる。図3はYB<sub>6</sub>の場合を示すが、BCS curveからはずれ strong-coupling系であることを示している。このはずれから超伝導理論のgap equationを使って $\alpha^2 F(E)$ が求まる。(図4)。ここでF(E)はphonon density of states,  $\alpha^2$ はelectron phonon coupling係数である。peakが~11 meV近くにあるが、最近 neutronのinelastic scatteringで与えられているLaB<sub>6</sub>のdispersion curve<sup>5)</sup>と比較すると、LaB<sub>6</sub>ではほぼ12 meV近くでpeakが見られるはずで、YがLaより軽いことを考えたと11 meVは小さすぎ、最初に指摘したB-B間の距離との関係、あるいはLaB<sub>6</sub>とYB<sub>6</sub>との $\alpha^2$ の違い、等今後追求すべき問題である。

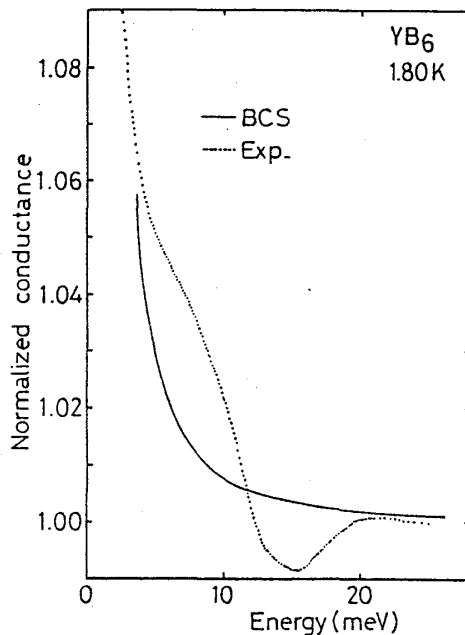


図3. YB<sub>6</sub>の normalized conductance

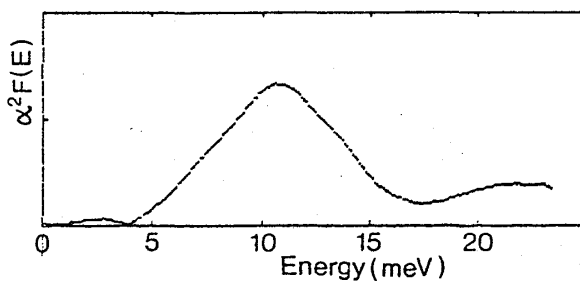


図4. YB<sub>6</sub>の  $\alpha^2 F(E)$

1) A. Hasegawa and A. Yanase ; J. Phys. F: Metal Phys. 7 1245 (1977)

2) Y. Aoki ; Thesis 1982 (東北大)

3) R. Naslain et al. ; Boron and refractory borides, Springer (1977) p285.

4) W.A. Thompson and S. van Molnar ; J. Appl. Phys. 41 5218 (1970)

5) H. Smith ; private communication